

日本通訳翻訳学会

第 16 回年次大会

スケジュール
交通アクセスと会場案内
シンポジウム
予稿集

2015 年 9 月 12 日(土)－13 日(日)
会場 青山学院大学

日本通訳翻訳学会第16回大会スケジュール

開催日:2015年9月12日(土)~13日(日)

会場:青山学院大学

第1日(9月12日)

9:45	受付開始		
10:20 -10:30	17号館 17511	開会式	
10:30 -12:00	17号館 17511	<p style="text-align: center;">シンポジウム 歴代会長に聞く日本通訳翻訳学会の過去・現在・未来 【登壇者】近藤正臣、鳥飼玖美子、船山仲他 【モデレーター】水野的(青山学院大学)</p>	
12:20 -13:00	17号館 17511	総会	
13:00 -14:00	昼食		評議員会
	17号館 17511 A会場	17号館 17501 B会場	17号館 17502 C会場
14:00 -14:30	A-1 「文学翻訳の著作権を巡る問題」 NGUYEN Thanh Tam (神戸大学大学院国際文化学研究科D) (司会:三ツ木道夫)	B-1 「主成分分析を用いた同時通訳者のタイプ分類」 笠 浩一朗(三重短期大学) 松原 茂樹(名古屋大学) (司会:瀧本真人)	C-1 「医療通訳経験者の派遣内容と今後の課題:あいち医療通訳システム認定医療通訳者の派遣実績調査から」 浅野輝子(名古屋外国語大学) 津田守(大阪大学、名古屋外国語大学) 服部しのぶ(藤田保健衛生大学) 村井はるか(藤田保健衛生大学) (司会:武田珂代子)
14:45 -15:15	A-2 「宗教的テキストに関するストラテジー:クラーンの日本語訳の問題性をめぐって」 ハガグ・ラナ(一橋大学大学院言語社会研究科博士研究員) (司会:三ツ木道夫)	B-2 「コールセンター型遠隔通訳サービスの特徴と品質への取り組み」 マツケルビー麻衣子(立教大学) (司会:瀧本真人)	C-2 「医療通訳ウェブ教材開発について」 大野直子(順天堂大学) 加藤純子(大阪大学) (司会:武田珂代子)
15:30 -16:00	A-3 「ウルガータ聖書・マタイによる福音書におけるヒエロニムスの翻訳法」 高畑時子(日本学術振興会特別研究員 RPD) (司会:三ツ木道夫)	B-3 「法廷通訳人が求める制度改革のあり方」 鶴田彬(株式会社ケミックス) (司会:瀧本真人)	C-3 「逐次・同時通訳訓練に iPad を導入することによって得られる効果」 吉村謙輔(中央大学) (司会:武田珂代子)
16:15 -16:45	A-4 「長崎の地役人としての阿蘭陀通詞について:彼らに課せられた任務、役割と倫理観に関する考察」 田中深雪(大東文化大学) (司会:三ツ木道夫)	B-4 「米国における通訳人を介した事情聴取の『伝聞問題』:言語学的分析方法」 田村智子(早稲田大学) (司会:瀧本真人)	C-4 「翻訳テクノロジー教育の e ラーニング化の提案」 山田 優(関西大学) 立見みどり(立教大学) (司会:武田珂代子)
17:30 -19:30	アイビーホール青学会館 レストラン「フィリア」 <p style="text-align: center;">懇親会</p> ※懇親会会費(一般4,000円 学生3,000円)は当日、受付でお支払いください。		

第 2 日(9 月 13 日)

	17 号館 17601 A 会場	17 号館 17602 B 会場	17 号館 17603 C 会場
10:00 -10:30	A-5 「中国における通訳者の規範意識: 近現代及び現代通訳者の口述史分析から」 平塚ゆかり(順天堂大学) (司会: 坪井睦子)	B-5 「スコパス理論の視点から見た視聴覚翻訳における注の転移: 韓国ドラマ『宮廷女官チャンゲムの誓い』を例に」 鄭 雁天(神戸大学国際文化学研究所グローバル専攻・言語コミュニケーション D) (司会: 河原清志)	C-5 「エラー・カテゴリーに基づく翻訳学習者の学習過程における習熟度の分析」 山本真佑花(神戸女学院大学大学院文学研究科英文学専攻 M) 田辺希久子(神戸女学院大学) 藤田 篤(情報通信研究機構) (司会: 長沼美香子)
10:45 -11:15	A-6 「形式を中心に和歌の漢訳方式について: 『小倉百人一首』を例にして」 孫 詩彧(北海道大学 教育学院・教育福祉グループ M) (司会: 坪井睦子)	B-6 「翻訳における非言語要素の役割」 藤濤文子(神戸大学) (司会: 河原清志)	C-6 「英語教師志望者による「翻訳」と「英文和訳」: プロダクトとプロセスの観点から」 守田智裕(広島大学大学院教育学研究科英語文化教育学専修 M) (司会: 長沼美香子)
11:30 -12:00	A-7 「中国語における女性三人称代名詞『她』の確立される原因について」 劉 芳(首都大学東京博士後期課程 D) (司会: 坪井睦子)	B-7 「政治的発言の逐次通訳におけるリスク管理としての lengthening」 松下佳世(国際基督教大学) (司会: 河原清志)	C-7 "Impact of teacher written feedback on students' translation: How "mistranslation" is treated" 鹿野 緑(南山大学) (司会: 長沼美香子)
12:00 -13:30	昼食		「院生コロキアム」 院生有志による自主セッション (司会: 篠原有子)
13:30 -14:00	A-8 「戦後におけるアメリカ文学の紹介・翻訳の位置づけ: ポリスシステム理論を通じた分析に基づいて」 邵 丹(東京大学人文社会系研究科 D) (司会: 田辺希久子)	B-8 「ローカリゼーションにおける翻訳者の職務意識に関する考察」 鈴木理恵子(立教大学異文化コミュニケーション研究科博士前期課程修了) (司会: 山田優)	C-8 「スラッシュ・リーディングと音読訓練: 初級英語クラスにおける実践報告及び学習方法と学習動機への影響」 篠塚勝正(成城大学他) 柴田節枝(カリフォルニア州立大学フラトン) 水澤祐美子(慶応義塾大他) (司会: 石原知英)
14:15 -14:45	A-9 「日本の『翻訳論』の変遷と展開: 近世・近代翻訳の言説を辿る」 齊藤美野(順天堂大学) 坪井睦子(立教大学) 佐藤美希(札幌大学) 長沼美香子(神戸市外国語大学) 北代美和子 南條恵津子(神戸女学院大学) (司会: 田辺希久子)	B-9 「研究法の視点から見た通訳研究の可能性と課題: 研究法・論文執筆プロジェクト活動報告」 石黒弓美子(東京外国語大学) 新崎隆子(東京外国語大学) 高橋絹子(上智大学) 田村智子(早稲田大学) 戸谷比呂美(武蔵野大学) 渡部富栄(大東文化大学) (司会: 山田優)	C-9 "Using back-translation as a tool for promoting focus on form" 花岡 修(東京国際大学) (司会: 石原知英)
15:00 -15:30			C-10 "The applied performance test of English interpreting in the written form: Testing and assessment in English interpreting studies at universities in Japan" 山田宏子(関西外国語大学短期大学部) (司会: 石原知英)

- 研究発表＝20分、質疑応答＝10分(質問は発表内容に直接関連したことについてのみ手短に行うものとします。質問者の単なる意見の陳述はご遠慮ください。)
- 各発表間の15分間は出入室のための時間です。移動はすみやかにお願いします。
- 発表スケジュールにある (M)、(D) は発表者がそれぞれ博士前期課程(修士課程)、博士後期課程の学生会員であることを示します。

発表者の皆さんへ:

- プロジェクターとパソコンは各教室に用意してあります(ただし、ウィンドウズ対応のみ)。パワーポイントをご使用の方は Power Point 2007までの形式でファイルを作成・保存した上で、データを USB メモリーに入れて当日ご持参ください。それ以降の形式で保存したものは会場のパソコンでは再生できない可能性がありますのでご注意ください。
- パソコンをご持参の方は各自発表前に会場で接続の確認をしていただくようお願いします。
- PC がうまく機能しない場合の対策の意味合いも含め、コピーを配布資料として準備しておいてください。枚数は 40 枚程度お願いします。

[大会委員会]

水野的(大会委員長 青山学院大学)、稲生衣代(実行委員長 青山学院大学)、内藤稔(運営委員長 東京外国語大学)、河原清志(実行委員 金城学院大学)、高橋絹子(実行委員 上智大学)、青山学院大学学生他

[プログラム委員会]

武田珂代子(委員長 立教大学)

第1日(9月12日) 10:30-12:00

17号館 17511

シンポジウム

歴代会長に聞く: 日本通訳翻訳学会の過去・現在・未来— 知の継承のために

日本通訳翻訳学会が2000年9月に日本通訳学会として発足してから今年で設立15周年の節目を迎える。当初はおよそ60人だった会員数は間もなく500人に迫ろうとしている。2008年には現在の日本通訳翻訳学会となり、通訳学のみならず日本の翻訳学の拠点として多くの成果を挙げ、アカデミーに確固とした位置を占めるに至っている。

本シンポジウムは、「日本通訳翻訳学会の過去・現在・未来— 知の継承のために」と題して、日本に通訳学と翻訳学という学問分野を確立するという重責を果たしてこられた3人の歴代会長に、それぞれの観点からのお話を伺う。

パネリスト (登壇順)

近藤正臣先生 (初代会長)

東京国際大学客員教授 大東文化大学名誉教授

国際基督教大学(ICU)教養学部社会科学科在学中にアメリカ合衆国国務省付き随行通訳者として勤務。ICU卒業後、中央公論社に勤め、ICU行政大学院修士課程修了。サイマル・インターナショナル、日本コンベンションサービスで通訳をし、1976年より大東文化大学に奉職。現在、東京国際大学客員教授・大東文化大学名誉教授。主な著書に、『開発と自立の経済学』(1989)、『通訳者のしごと』(2009)、『通訳とはなにか』(2015)など。

鳥飼玖美子先生 (二代目会長)

順天堂大学国際教養学部特任教授 (学部アドバイザー)、国立国語研究所客員教授。

英国サウサンプトン大学大学院人文学研究科 (博士課程) 修了。専門分野は、英語教育論、言語コミュニケーション論、通訳翻訳学。NHK「ニュースで英会話」全体監修とテレビラジオ講師を務める。著書に『通訳者と戦後日米外交』(2007)、『国際共通語としての英語』(2011)、『戦後史の中の英語と私』(2013)、『英語教育論争から考える』(2014)、編著に『よくわかる翻訳通訳学』(2013)など。

船山仲他先生 (三代目会長)

神戸市外国語大学学長

大阪外国語大学外国語学部ロシア語学科卒業。京都大学大学院文学研究科 (言語学専攻) 博士課程単位取得退学。会議通訳者を経て、京都工芸繊維大学助教授、大阪府立大学教授、スタンフォード大学客員研究員を歴任。2003年より神戸市外国語大学教授、2011年より同理事長・学長。共著書に『言語学を学ぶ人のために』(1986)、『私たちの日本語研究』(2015)など。

【近藤先生発言要旨】

本学会は、通訳理論研究会 (IRAJ、1990～)をその前身とし、日本通訳学会 (JAIS)が発足した(2013)。わたくしは世話役・会長をつとめた。くも膜下出血に倒れた(2003)あと、鳥飼先生に会長職を引き継いでいただき、その後、翻訳研究を包含し(2008)、今日の形となった。

IRAJ を立ち上げたのは、ヨーロッパを中心に活発な通訳研究が行われていたことを知り、日本でも...と深く自覚したためである。まずはヨーロッパの通訳研究の成果を吸収し、日本・日本語の特殊性などについて世界に発信していくべきだと強く思ってきた。

【鳥飼先生発言要旨】

翻訳学を包含して学会名称を変更したこと、FIT に加盟し国際的ネットワークが強化されたことなどについて語る。

【船山先生発言要旨】

通訳プロセスの分析可能性

通訳行為における訳出には直感的に遂行される側面と意識的に表現を選ぶ側面とがある。たとえば専門用語の訳出は二言語間の定着した対応関係を意識するので後者の例となる。前者の直感的な処理は通訳者の経験や技と見られることが多く、起点発話の論理の把握、自然でわかりやすい表現などの項目の下に、また、同時通訳については、訳出順序の変更などの技術的な工夫として論じられる。しかし、言語形式に基づいてこのような直感的、総合的な考察を深めるには限界がある。本講演では、言語形式の境界を越える概念レベルの考察を持ち込むことによって通訳プロセスをどこまで分析できるかを考える。

モデレーター

水野 的(現会長)青山学院大学

1 日目 A 会場 (17511) 14:00 – 14:30

司会 三ツ木道夫

A-1

文学翻訳の著作権を巡る問題

NGUYEN Thanh Tam (神戸大学大学院国際文化学研究科博士後期課程 D)

翻訳者の地位をどのように理解すべきかは、予てより論じられている課題の一つである。翻訳理論の分野では、多くの研究者は翻訳、特に文学翻訳は創作物の一種とし、翻訳者の著作権を認めるべきだと主張している。しかし、翻訳書の出版が盛んになった現在にあっても、文学翻訳者という職業は経済的に自立出来ていないのが現実である。それに加えて、出版に関する各種法律や国際協定が存在するにもかかわらず、翻訳者の権利が侵されないという保証はないというのが現実である。翻訳者の権利は、著作権の有無と印税の支払いという実質的な数値で明らかに表示されるだろう。今回のアンケート調査を行ったところ、ベトナムにおいては、日本文学翻訳者は翻訳権を持っていないのが一般的であることが明らかになった。多くの場合は、権利をよく理解しておらず、いわゆる「弱い」立場に置かれているためだろう。この実状を改善し翻訳者が文学翻訳に安心して取り組める環境を作るために、翻訳の状況を確認する必要がある。本発表では、まず先行研究に基づいて、文学翻訳の著作権に関してどのような国際条約や法律があるのかを整理し、国による運用の違いを調査する。さらに、翻訳者の威信や出版社との関係などという要素も、翻訳の著作権の処理に影響を与えているため、確認する。次に、現場で活躍している日本文学の翻訳者の意見調査を実施し、その結果を踏まえて、翻訳の著作権の現状から浮かび上がった諸問題を整理し、検討する。その際、特殊な翻訳方略としての重訳の場合は、著作権はどのように扱われているのかも視野に入れる。また、「原作の著作権の有効期限が切れている場合には、出版社(及び他の関係者)は媒介翻訳の著作権を時折見逃すことがあるようだ」との Dollerup (2006)の指摘を踏まえ、改めて重訳の場合に媒介翻訳の翻訳者の地位について考察する。最後に、文学翻訳の著作権の諸問題が、翻訳の出版にいか

【参考文献】

Dollerup, C. (2006). *Basics of Translation Studies. (First Edition: Romania)*. Iasi: Institutul European, pp.75-92.

1 日目 A 会場 (17511) 14:45 – 15:15

司会 三ツ木道夫

A-2

宗教的テキストに関する翻訳ストラテジー:クルアーンの日本語訳の問題性をめぐって

ハガグ・ラナ(一橋大学大学院言語社会研究科博士研究員)

翻訳とは、起点言語で書かれたテキストを目標言語のテキストに変換する作業である。テキストは、音声、文法、意味、文体などテキストそのものに関わるものだけでなく、作者や読者の心理的・文化的背景などのコンテキストなど、さまざまな要素によって構成されている。それでは、このうちのどれを起点言語から目標言語に移せばいいのだろうか。ここに、テキストのどの部分に焦点を合わせるかを決定する「翻訳ストラテジー」の必要性が生まれる。なぜなら、翻訳は起点言語のテキストのなかから翻訳すべき要素を選択しなければならないからである。通常の場合、翻訳は意味的側面に注意を向け、テキストの「言おうとしていること」を目標言語で表現することが翻訳の任務となる。しかし、宗教的テキストにおいては、そのあらゆる部分に「宗教性」が関与しているとみなされることがあるため、しばしば宗教的テキストの「翻訳不可能性」が語られる。それでは、宗教的テキストを翻訳しようとするとき、翻訳者はどのような翻訳ストラテジーを働かせるべきなのだろうか。

この報告の目的は、クルアーンの代表的な日本語訳とみなされている井筒俊彦訳(岩波書店)と三田了一訳(日本ムスリム協会刊)を比較することで、クルアーンという宗教的テキストに対して各々の訳者がどのような翻訳ストラテジーを取ったかを検討することである。三田はムスリムの観点からクルアーンを訳したため、何よりも聖典の荘重な文体をできるかぎり日本語の文章語で移そうとした。それに対して井筒は、クルアーンが重視するアッラーと預言者ムハンマドとのコミュニケーションに焦点を当て、その「語りかけ」の文体を日本語に移すとした。井筒は例えば「われこそアッラーであるぞよ」(ター・ハー章 14 節(のように、終助詞や間投詞、くだけた表現などの口語的要素を駆使して、発話場面の共有を表現しようとした。しかしそのことが同時に訳文をきわめて口語的なものにし、ときには原文のアラビア語にはない日本語に特有の意味のニュアンスを訳文に負わせることになった。しかし、これは井筒の訳者としての個人的傾向によるのではなく、アラビア語と日本語の文体構成の相違——荘重でありながら語り手どうしの「近さ」を表わす文体が存在するかどうか——から来る問題であることを明らかにする。

1 日目 A 会場 (17511) 15:30 – 16:00

司会 三ッ木道夫

A-3

ウルガータ聖書・マタイによる福音書におけるヒエロニムスの翻訳法

高畑時子 (日本学術振興会特別研究員 RPD)

古代ローマ末期、聖書を原語から直接翻訳してウルガータ聖書を世に送り出したヒエロニムス (Eusebius Sophronius Hieronymus, 341~347 年頃~419/420 年) は、自身の書簡 57「翻訳の最高種について」(注1) において、聖典の翻訳は逐語訳を極力心掛けたが、その他の著作は意味対応訳で訳したことを明言している (5 節)。

実際に彼が主となって訳したとされるウルガータ聖書には、原文では同じ文言が繰り返されているが、彼はそれらを全て同じ文章では訳さず、原文の意味は変えずに、同じ意味を持つ異なる単語を使うなど少しずつ訳文の表現を変え、訳文が全体的に自然なラテン語になるよう多くの工夫が見られる。

だが、彼が主に訳したとされるマルコによる福音書の原書とウルガータ聖書の訳文を比較すると、表現だけでなく意味内容も異なっている箇所が多々ある。特に 8:26 でヒエロニムスは、最も慎重に訳すべきイエスの言「あなたはその村に入るな」(原文) を「あなたの家へ行け、そしてもしあなたが村に入っても誰にも言うな」(訳) と、表現も内容も全く変えて訳してしまっており(反対の意味にさえなっている)、彼が書簡 57 で述べた翻訳理論とは矛盾する。ではなぜ彼はこのような訳し方をしたのか。

既にマンデイにより、当時のキリスト教会への配慮:「意味を変えていると見られると、異端の疑いをかけられることになる」が指摘されているが(注2)、本発表ではヒエロニムスの書簡 57 に見られる翻訳理論とその新約聖書における実践法を具体的に比較研究し、ヒエロニムスが目指した理想的な翻訳方法を探ることにより、それ以外の可能性があるかどうかを模索する。

ヒエロニムスは、聖典とそれ以外の書の翻訳法を変えていることを明言しているものの、実際はその差はほとんど無いか僅かであること、単なる誤訳の可能性を除き、時には原文の意味内容さえも変えることは、ヒエロニムスにとっては必然だった可能性を指摘したい。

注1: 発表者による全訳および作品解題は、「< 翻訳 > ヒエロニムス著『翻訳の最高種について』(書簡 57 『パンマキウス宛の手紙』) (Hieronymus, Epistula 57, Ad Pammachium: De optimo genere interpretandi)」、『近畿大学教養・外国語教育センター紀要』、第 6 巻第 1 号 (2015 年 7 月発行予定)。

注 2: ジェレミー・マンデイ著、鳥飼玖美子訳、『翻訳学入門』、東京、2009 年、31 頁参照。

1日目 A会場 (17511) 16:15 – 16:45

司会 三ッ木道夫

A-4

長崎の地役人としての阿蘭陀通詞について: 彼らに課せられた任務、役割と倫理感に関する考察

田中深雪(大東文化大学)

江戸時代、わが国には「4つの口」が存在していたことが知られている。その中の一つである「長崎口」では、主にオランダ人の管轄にあたる阿蘭陀通詞が配置されていた。今回の発表では、彼らが果たした任務、役割それに職業倫理などについて考察する。

幕藩体制下における阿蘭陀通詞の立ち位置は、現代の通訳者とは大きく異なっている。彼らは基本的には長崎の奉行所に奉仕する町役人であり、総じて長崎奉行と阿蘭陀商館との外交・貿易交渉を弁ずる通訳官兼貿易官(片桐 1985)であった。そのため彼らには、常に幕府側の人間として、その職務を遂行することが求められていた。

当時の阿蘭陀通詞たちの活躍や偉業については広く知られている。海外からの情報が限られていた時代、彼らの異文化に対する探求心や知的好奇心は、蘭学の興隆の一翼を担った。そして蘭学はやがて英学へと発展し、明治という新しい時代の中で、日本が近代国家として目覚ましい発展を遂げていく際の推進力の一つとなった。

このように大きな成果をあげた阿蘭陀通詞たちであるが、その一方で、現存する文献の中には、彼らに対する批判も残されている。阿蘭陀通詞たちに対して、オランダ人側からは自分たちの意図を歪曲して日本人側に伝えているという不満や不信感が常にあった。また日本人側からも、通詞たちが自分たちの利権を優先しているのではないかという厳しい眼差しが寄せられている。さらには、通詞たちが忠誠を誓った江戸幕府に対しても、意図的に訳さないなど、情報操作を行っていたという疑いを示唆する文献も残っている。厳しい封建社会の中で、彼らはどうしてこのような背反行為に及んだのであろうか。彼らの職業に対する価値観や倫理観はいかなるものであったのだろうか。

今回の発表ではこれらの疑問に対して、通詞たちが活躍した近世という時代背景、江戸と貿易都市長崎との政治的な力学、経済的な諸事情、階級社会や家制度などをもとに考察する予定である。改めて述べるまでもないが、21世紀の日本で活躍する現在の通訳者と当時の通詞たちの置かれた状況は大きく異なり、我々の尺度で彼らを一方的に判断することは適切ではない。しかし、通訳、翻訳の任に携わる者が国家体制の中の道具として組み込まれ、独占的に情報を占有することが可能な状況に置かれてしまった時、いかなる問題が生じるのか。当時の通詞たちのあり方を考察することは、現代の通訳者の役割を見つめ直す意味でも意義深いと思われる。

【参考文献】

片桐一男(1985)『阿蘭陀通詞の研究』吉川弘文館

2日目 A会場 (17601) 10:00 – 10:30

司会 坪井陸子

A-5

中国における通訳者の規範意識: 近現代及び現代通訳者の口述史分析から

平塚ゆかり(順天堂大学)

王斌華(2013)は、Toury(1995)、Chesterman(1997)などの通訳規範論を理論的枠組みとした中国における通訳規範研究である。王(2013)は英語圏の通訳倫理規定などから抽出した通訳規範を「規定性規範」と定義し、中国における首相記者会見時の中国語—英語通訳のコーパスデータから抽出した通訳規範を「実際の規範」と定義し、比較分析を行った。分析結果として、通訳者の実際の訳出には①内容の補填、②内容の省略、③内容の修正等のシフト(ずれ)が見られ(王, 2013, pp. 97-117)、これらのシフトが起こる要因として、「論理(ロジック)の明晰化」「メッセージの内容の具体化」「話の意図の強調」(pp. 118-119)などの「実際の規範」意識を挙げている。これは「規定性規範」として挙げられる「忠実」「中立」とは相反する結果である (pp. 121-125)。王の研究では首相記者会見担当の通訳者インタビューも分析資料として用いており、そこには「このように訳すべき」とする「規定性規範」に矛盾する実際の訳出行為が語られている。

本発表は王の研究に依拠し、オーラルヒストリーから通訳者の顕在的な意識の上に現れる規範意識と潜在的な意識下にあるとみられる規範意識を分析、検証する。まず近現代中国において活躍した外交通訳者の言説を「忠実」というキーワードに着目し考察する。具体的には、外交通訳者として政府首脳など要人の通訳に携わってきた姜椿芳と李越然の「通訳者の心得」「準、順、快」の通訳論を取り上げ、通訳者としての規範意識と歴史的背景との関連性について述べる。

次に、現代日中通訳者の語りのデータから、通訳者が語りで明示した「規定性規範」と、「語り手を表す表情的な表現」(桜井, 2012)としての「実際の規範」意識を抽出し、分析を行う。

分析結果として、中国語母語話者の語りには、これまでの中国の通訳論、「忠実」などの「規定性規範」が明示化されたが、通訳者の訳出行為に関する語りに現れる「実際の規範」意識は「規定性規範」とは相反すると思われる指標が示され、「忠実」であるべき対象についてもそれぞれ異なることが推察される結果が示された。

最後に、通訳者を目指した動機や言語習得の背景、通訳訓練の有無、通訳業務形態などに着目し、これらの要因と規範意識形成の関係について考察する。

【参考文献】

Chesterman, A. (1997). *Memes of translation*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.

Toury, G. (1995). *Descriptive translation studies and beyond*. Amsterdam: John Benjamins.

姜椿芳(1953).「略談口译問題」『翻译研究论文集』「頁不明」中国翻译工作者协会.

姜椿芳(1997).『怀念集』北京. 奥林匹克出版社.

李越然(2001).『中苏外交亲历记: 李越然回忆录』北京. 世界知识出版社.

桜井厚(2012). 『ライフストーリー論』弘文堂.

王斌华(2013). 『口译规范的描写研究—基于现场口译较大规模语料的分析』外语教学与研究出版社.

2 日目 A 会場 (17601) 10:45 – 11:15

司会 坪井陸子

A-6

形式を中心に和歌の漢訳方法について:『小倉百人一首』を例にして

孫 詩彥(北海道大学 教育学院・教育福祉グループ M)

本稿はできるかぎり和歌の趣をもとのままに伝わるため、その翻訳を改良することを目的にしている。具体的にいえば、和歌の集大成である『小倉百人一首』を例にし、その漢訳の形式(文体)を巡って数多くの翻訳バージョンを分析してから現存の問題点をまとめ、それに基づいて実現可能性の高い翻訳方法を検討してみた。結果として、訳者が和歌の内容、背景、境地などの要素を十分に理解していないことと訳した中国語の文章が古典詩詞の文法・格律に沿っていないなどといった問題点が示唆された。そして、様々な内容でそれぞれの時代に詠まれた和歌を無理矢理一つの形式に整えて訳す現状も何か不合理ではないかと思われる。こういった問題点に対して、文法、修辞法の確認不足、創作背景の考察不十分並びに訳者の教養が足りないという三つの主なる要因を挙げて検討した。その上、『小倉百人一首』の和歌を描写対象、作者身分、時代背景という要素によって分類し、より適切な形式を提示しながら、例文を添えて形式に相応しい言葉遣いと文法で原作を翻訳する方法を検討した。和歌特有の修辞法などにも焦点を当てて考察した。最後に、提起した方法の実現可能性を証明するために、まとめた方法をもって『小倉百人一首』百首の和歌を翻訳してみた。本稿では問題提起、原因分析、解決方法という三つの部分を揃え、信憑性と説得力を増やすため例文をできるだけ多く取り入れて検討し、試訳を加えて形式を中心に和歌の漢訳方法について系統的に考察した。さらに、和歌だけでなく、本論で提起された翻訳方法は浄瑠璃や能などの脚本を訳すときにも活用できると考えられ、今後の和歌漢訳および古典文学の翻訳にとって意義あるものと望まれる。そしてなによりも本論で提起された形式を無理に揃わせず、「信・達・雅」を求める翻訳の方法論と実際にその方法を応用する実践の両方を重視することが言語の種類や文章の内容に限られない普遍的な意義をもつものと信じられる。

2日目 A会場 (17601) 11:30 – 12:00

司会 坪井陸子

A-7

中国語における女性三人称代名詞「她」の確立される原因について

劉 芳(首都大学東京博士後期課程 D)

現代中国語において、女性三人称代名詞は、英語「She」の翻訳として生まれた。当時、いくつかの翻訳語が出現していた。最初は「他女」、その後「伊」と「她」が出現し、最終的に「她」が、女性三人称代名詞として確立した。翻訳によって引き起こされた新たな言語現象の結果は、いかなる理由によるものなのか。言い換えると、「她」が、いかなる理由によって「伊」を凌いだのか。女性三人称代名詞が確立された過程を辿ることは、この新しい代名詞が持った新たな意義と価値が、近代中国において受容される過程を確認することにもなる。

本稿では、近代の翻訳における漢字造語の視点から、翻訳語を普及するプロセスへの試論、さらに当時の中国では最も流行な小説雑誌『小説月報』で発表された作品を考察してみた。考察の結果を見ると、「她」と「伊」が多く使われていた理由は、当時三人称単数を主人公とする西洋小説の新技巧を応用するためか、あるいは「彼」(他)との男女を区別するためであった。そして、作者たちのこの新代名詞に対する理解の違いによって、「她」や「伊」の採用が異なっている。「她」が女性三人称代名詞として確立される理由は以上の要素によるだけではなく、もう一つ無視できない理由は、口語における人称代名詞についてである。朱自清によると三人称代名詞の使い分けは、書き言葉においてまだ意味があるが、口語では必要がないという。

女性三人称代名詞の生まれは、アジアにおける特有な現象だったと言ってもよい。日本語における女性三人称代名詞「彼女」も、韓国語における女性三人称代名詞「그녀」も、西洋語への対応によって生まれたものである。中国語にも同じ現象があった。以上の考察と黄興濤などの先行研究を踏まえ、現代中国語における「她」と「伊」の「争い」は、近代以降中国における新旧文化・価値の間の衝突・妥協・融合などのいくつかの側面を表していると言える。ゆえに女性三人称代名詞ないし三人称代名詞の全体における使用上の変遷を整理し分析することは、特に近代以降の中国ではいかなる新たな変化が起こっていたか、ということを探求するとき、重要な意義を持っているのである。

2 日目 A 会場 (17601) 13:30 – 14:00

司会 田辺希久子

A-8

戦後におけるアメリカ文学の紹介・翻訳の位置づけ: ポリシステム理論を通じた分析に基づいて

邵 丹(東京大学人文社会系研究科 D)

▷目的に至る背景

戦後は翻訳活動が活発になった時期の一つである。1950 年代から 1970 年代までに、戦争で中断を余儀なくされた欧米文学熱が再燃したⁱ。しかし敗戦を迎えた 1945 年を区切りに、日本はそれまでのヨーロッパ志向から圧倒的なアメリカ志向へと変わっていき、アメリカ文学の紹介・翻訳が盛んに行われるようになった。特に、1950 年代からアメリカの「行動主義文学」やヘミングウェイを筆頭とする「失われた世代」の作家たち、チャンドラー、ハメットなどミステリの紹介や翻訳が成され、人々に「戦後の印象としての外国文学＝アメリカ文学」ⁱⁱというイメージを抱かせる。

▷研究目的

本稿は戦後アメリカ文学の紹介・翻訳に焦点を当て、当時のアメリカ文学の紹介及び翻訳はどのような文学規範(=NORMS)の下でなされていたのかⁱⁱⁱ、また当時のアメリカ文学の翻訳にはどのような傾向が見受けられ、その時代の文学システム内でどのような位置にあったのかを考察する。

▷研究方法

本稿はポリシステム理論を用いて、戦後のアメリカ文学の紹介・翻訳を分析する。この理論は翻訳文学を「文学システム(Literary Polysystem)」の一部として捉え、それが中心的な位置を占める際の働きを考察するもので、翻訳が文学をはじめ文化の形成に非常に重要な役割を演じてきた日本において、本稿の分析には適していると言える。これまで、この理論を用いた翻訳文学の分析は、明治期のものはあるものの、戦後を取り上げた論考はほとんど見られない。

▷主な結果

アメリカ文学の紹介・翻訳の場合は、まず戦後最初の 15 年間に於いて、GHQ の占領政策により、ヘミングウェイやスタインベックの紹介・翻訳が系統的に成され、アメリカに対する良いイメージの植え付けが行われた。その後、日本は自発的かつ自立的にアメリカ文学を選択して翻訳する立場になった。

▷示唆

60 年代末から 70 年代にかけて、伊藤典夫や藤本和子によってなされた、ヴォネガットやブローティガンの翻訳が、日本文学にも影響を及ぼし、高橋源一郎や村上春樹のような新しいタイプの文体を持ち味とする作家が登場する土壌を作ったと考えられる^{iv}。

i まず、1950 年代に旧訳中心の世界文学全集の刊行が行われ、翻訳出版点数はほぼ倍増し、文学の翻訳はこの 時期の翻訳出版物のおよそ三分の二を占めるようになった。また、1960 年代に新訳中心の世界文学全集の発刊ならび同時代の海外文学の叢書、シリーズという形での刊行や、より完備された外国作家の個人全集の出版が行われた。最後に 1970 年代に世界文学全集、海外新文学紹介叢書の文庫化が見られ、さらに海外同時代文学の紹介やその翻訳掲載を特色としていた文芸雑誌『海』が登場した。井上健『文豪の翻訳力近現代日本の作家翻訳谷崎潤一郎から村上春樹まで』武田ランダムハウスジャパン、2011 年。

ii 原卓也 西永良成『翻訳百年-----外国文学と日本の近代』大修館書店、2000 年、3 頁。

iii 藤濤文子・伊原紀子・田辺希久子編訳『翻訳研究のキーワード』研究社、2013 年、152 頁。

iv 加藤典洋「翻訳文学に培われた新しい感性」ニューリダ- 19(1)、はあと出版、2006 年、60-63 頁。

2 日目 A 会場 (17601) 14:15 – 14:45

司会 田辺希久子

A-9

日本の「翻訳論」の変遷と展開: 近世・近代翻訳の言説を辿る

齊藤美野(順天堂大学)

坪井睦子(立教大学)

佐藤美希(札幌大学)

長沼美香子(神戸市外国語大学)

北代美和子

南條恵津子(神戸女学院大学)

2014 年度から開始した日本の近世・近代翻訳論研究プロジェクトは、歴史の中に多様な形で残されている翻訳に関する言説を集め精読し、日本における翻訳論の変遷と展開を捉えようとするものである。これまでの会合を通しメンバーが知り得た事柄をまとめ、今後どのように知識・情報を繋げ、最終的な目標としている翻訳研究の枠組みを構築しうるか、展望を述べる。

キリシタン文学は西欧語から日本語への初めての翻訳として、日本翻訳史上に重要な位置を占める。翻訳研究の視点からの新たなアプローチの可能性を探るために、とりかかりとして『イソポのハブラス』(1593)と『こんてむつすむん地』(1610)を選び、翻訳者の翻訳観や翻訳姿勢を読みとろうと考えた(前者は日本初の西欧文学の翻訳、後者はラテン語原文が明確になっている上に、現代日本語訳も含めた各国語の翻訳との比較も可能である)。今後はテキストの分析を深めるとともに、研究対象を宣教師らによる翻訳についての言説にまで広げることを目指す。

荻生徂徠(1666-1728)は『譯文荃諦』(1711 頃)を著し、漢文を和訓で読み慣わすのは訳であり、本来は原語で理解すべきとするが、訳の有用性も説く。こうした翻訳観を近代の翻訳論に至る流れにいかに関与しているかが今後の課題だろう。杉田玄白(1733-1817)は、人体解剖の翻訳書『解体新書』(1774)やその翻訳プロセスでの苦心を綴った晩年の『蘭学事始』(1815 完成)によって、よく知られた江戸期の医師・蘭学者である。彼の用いた「翻訳・義訳・直訳」という概念は、近世日本の翻訳論として注目に値する。

明治期の雑誌記事「伯林に於ける著作権保護万国会議の状況」(水野, 1909, 『太陽』)と「片々」(署名なし, 1895, 『女学雑誌』)からは、近代初期の日本における翻訳作品・翻訳者の位置や評価が読み取れた。前者は著作者の許可なくして翻訳を行う正当性を、国際会議の場で諸外国に主張した報告であり、他の参加国と比し当時の日本において翻訳は特に重要であったとわかる。一方の後者には翻訳者に対し創作を促す箇所があり、創作文学が翻訳文学よりも高く評価されていた可能性が認められる。翻訳の地位や評価については、ほかの時期との関わりも含めさらに考察できるだろう。以上に示したような、各時代の翻訳論についてメンバー間で議論した事柄を学会員と共有する。

1 日目 B 会場 (17501) 14:00 – 14:30

司会 瀧本真人

B-1

主成分分析を用いた同時通訳者のタイプ分類

笠 浩一朗(三重短期大学生生活科学科)

松原茂樹(名古屋大学大学院情報科学研究科)

同時通訳者の通訳タイプには、最小訳出単位ごとに次々と訳出していく「即時処理」のタイプと、可能な限り長く聞いてから訳出する「遅延処理」のタイプの2つがあると言われている。この通訳タイプの分類は、訳出する単位(訳出単位)、及び、訳出されるまでの時間(訳出遅延時間)に着目したものである。

同時通訳の特徴を示す特徴量は訳出単位、訳出遅延時間以外にも、訳出率、訳文の長さ、ポーズの長さなど多数存在する。多数の特徴量をもとに同時通訳者をタイプ分類することができれば、より細分化したタイプに分類することができる可能性がある。しかし、タイプ分類するための特徴量が増えると、人手で通訳者を客観的に分類することは容易ではない。

そこで本研究では、同時通訳の訳出に表出する多数の特徴量をもとに、統計的な手法で通訳者をタイプ分類する方法を提案する。本手法では、主成分分析とクラスタリング手法を適用することで、同時通訳者を通訳タイプに分類する。

本分類では、まず主成分分析により、多数の特徴量を2個の合成指標(主成分)に圧縮する。2個の合成指標に圧縮することで、合成指標に基づいて平面上に通訳者をプロットすることができる。次に、平面上にプロットした通訳者を、k-means 法によるクラスタリング手法によりタイプ分類する。

本分類では、同時通訳者の特徴が表出する特徴量として、訳出率、訳出遅延時間、訳文の長さ、発話速度、発話率、ポーズの平均長、フィラーの頻度などを採用した。

本手法の有効性を確認するために、英日同時通訳者の分類実験を実施した。分類実験では、同時通訳コーパス(松原他, 2001)に収録された講演データに対する英日同時通訳データの一部を用いた。分類実験により、17人の英日同時通訳者を6個のタイプに分類することができた。

発表では、本手法による分類実験の結果を報告し、分類結果を考察する。

【参考文献】

松原茂樹・相澤靖之・河口信夫・外山勝彦・稲垣康善(2001)「同時通訳コーパスの設計と構築」『通訳研究』第1号, pp. 85-110.

1 日目 B 会場 (17501) 14:45 – 15:15

司会 瀧本真人

B-2

コールセンター型遠隔通訳サービスの特徴と品質への取り組み

マツケルビー麻衣子(立教大学)

近年の在日外国人および外国人旅行者の増加、そして 2020 年の東京オリンピック・パラリンピックを見据えて、自治体や公共機関、商業施設、宿泊施設、観光施設などの窓口における通訳の必要性が認識され始めている。こうした窓口で突発的に発生する通訳案件に応えるため、コールセンターに通訳者を集約し、遠隔で通訳を提供するサービスが増えている。

これまでも遠隔通訳は、国際会議やコミュニティというコンテキストで研究されてきたが、こうした窓口業務に対応したコールセンター型の遠隔通訳に焦点をあてているものはない。本発表では、現在日本で、各種窓口において導入されている代表的なサービスを検証し、そこで得たデータと考察を提示する。

窓口業務に対応している遠隔通訳サービスの多くに見られる特徴として、24 時間 365 日の対応を約束していること、英語・中国語・韓国語の 3 言語または英語・中国語・韓国語・ポルトガル語・スペイン語に対応していること、案件ごとの請求ではなく、一律の月額が設定されていること、従来の通訳派遣会社ではない会社によって運営されていることなどが挙げられる。

こうしたサービスを導入するメリットとしては、通訳者を常駐させるコストに比べると格段に安いこと、通訳者を都度手配する手間とリードタイムが省けること、そして同じようにこうした窓口業務で導入が検討されている自動通訳よりは訳出の品質が高いと思われることなどがある。

一方、このようなサービスにおける通訳の品質に影響を与えるものとして、通訳サービス提供者の品質に関する取り組みと、ユーザー側の理解と協力がある。通訳サービス提供者の品質に関する取り組みについては、請け負っている内容の難易度も加味した上での採用基準や教育・訓練、一人の通訳者が継続して対応する時間の長さを含めた労働条件などを考察する。また、ユーザー側では、事前の情報共有、雑音の遮蔽を含めた通信品質の保証、画面や映像などの通信内容の最適化、円滑な対話に必要なターンテイクングのルールの周知などにおいて理解と協力が必要となることを、先行研究の結果を紹介しながら説明していく。

1日目 B会場 (17501) 15:30 – 16:00

司会 瀧本真人

B-3

法廷通訳人が求める制度改革のあり方

鶴田彬(株式会社ケミックス)

本研究の目的は、現行の法廷通訳人制度には多くの改善すべき点があるという前提の下、8名の法廷通訳人へのインタビュー調査と、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチによるデータ分析を通じて、法廷通訳人が求める制度改革のあり方を探ることである。改革像を考える上では、2013年7月に日本弁護士連合会(日弁連)が公開した「法廷通訳についての立法提案に関する意見書」に立脚し、「資格制度の導入」、「継続的研修制度の導入」、「報酬」、「複数選任制」、「事後的検証制度の導入」の5つの論点に着目した。

まず、法廷通訳人の資格制度導入については、そもそも同制度が通訳人の確保に資するか疑問である上、「レベル分け制度の運用」「少数言語への対応」「資格が流用される」といった問題点が指摘された。一方、資格制度によって通訳人の能力が明示化され、事案の難易度に応じた選任に繋がるという見解もあった。

継続的研修制度については、研修に求める内容と求めない内容が明確に分かれた。前者には「通訳人によるユーザー教育の機会」「言語理論・通訳スキルを磨きたい」「資格更新の要件としての機能」「第三者機関による研修」、後者には「訴訟手続・専門用語を教えるべきか」、「倫理は試験の段階で問うべき」がそれぞれ包含された。

通訳人の報酬については、算定基準・明細が不明確であること、通訳人が複数選任された裁判において人数分の通訳報酬が支払われない場合があること、他の通訳業務に比して相対的に報酬が低いことが問題だとされた。

複数選任制に関しては、裁判員裁判または長期化・複雑化が見込まれる訴訟などでは通訳人でチームを組む必要があるという一方、これが機能するには「信頼関係とチームワークが不可欠」であり、また「一人で通訳したい」通訳人もいるため、日弁連が唱える複数選任制の原則化には懐疑的であった。

最後に、録音・異議・鑑定による事後的検証制度については、制度以前に「正確な通訳」とは何であるか、また検証がもたらす萎縮効果を理解することが必要とされ、運用に際しては「誤りはその場で正す」、法廷全体で「誤訳」に向き合う、「録音」により通訳人が守られることが求められた。

調査から、通訳人が求める改革像と日弁連の意見書は重なり合う部分がある一方で、乖離も多く見られた。将来の制度改革に向け、法曹三者と法廷通訳人による相互理解の促進と対等な議論が望まれる。

1 日目 B 会場 (17501) 15:30 – 16:00

司会 瀧本真人

B-4

米国における通訳人を介した事情聴取の『伝聞問題』: 言語学的分析方法

田村智子 (早稲田大学)

通訳人を介した事情聴取の「伝聞問題」は、「伝聞排除」を伝統的大原則とするコモン・ロー諸国が、供述の「証拠能力」を確保するために古くから試行錯誤してきた難問である。米国では 1892 年に *Massachusetts v. Yose* で、当事者同志が「通訳人を介して意思疎通を開始」すれば両者が「暗黙」に通訳を「共同代理人」として容認した「意思表示」であるとの判決が出た。この「通訳人は被疑者の『agent (代理人)』」であるとする理論と、1973 年に第 9 巡回区控訴裁判所が *United States v. Ushakow* で初めて使用した「language conduit (言語の導管)」という文言とがそれ以降抱き合わせとなり、「通訳人は被疑者の agent かつ language conduit である」がゆえに、連邦証拠法の伝聞例外規定の適用を受ける、というのがその後大多数の管轄区での先例判決となってきた。

しかし、2013 年に第 11 管区が連邦控訴裁判所として初めて「通訳人を介した供述は伝聞」であり、事情聴取した取調官ではなく通訳人自身が法廷で直接証言し反対尋問を受けなければ、合衆国憲法が保障する被告人の「対審権」の侵害になる、との判決を下した。第 11 管区のみ先の先例判決ではあるが、議論に大きな一石を投じている。

「導管論」は、「通訳学」でも古くから議論されている。多くは司法通訳の「正確さ」や「信頼性」を担保するため当局や裁判所が倫理規定等で順守を要求する「規範的 (prescriptive)」原則に対し、現場における通訳人が果たしている役割を「記述的 (descriptive)」に分析し、通訳人が実際には「導管」の枠を超えた役割を果たしているとするものや、当局が常に強く要求する「正確な逐語訳 (word-for-word translation)」なるものに対する「翻訳学」の立場からの問題提起である。皮肉なことに、「導管論」の否定は、事情聴取での証言が「伝聞」ではないとする法的根拠を崩し、通訳人自身が証言台に立ち自らの行った通訳内容に関しての反対尋問を受けることにもつながる。

ではそれとは逆に、事情聴取での通訳人を介したやり取りは通常の「また聞き」とは決定的に異なり法的にも「伝聞」とはならない、ということを言語学的な実証分析により主張することは可能であろうか？ 本発表ではその方法論を論じる。

2 日目 B 会場 (17602) 10:00 – 10:30

司会 河原清志

B-5

スコプス理論の視点から見た視聴覚翻訳における注の転移:韓国ドラマ『宮廷女官チャングムの誓い』を例に

鄭 雁天(神戸大学国際文化学研究所グローバル専攻・言語コミュニケーション D)

注は文学作品翻訳等においてよく見られるパラテキストの一要素であるが、視聴覚作品においては様々な制約があるために使用されにくいと思われる。視聴覚翻訳、特に字幕では、時間・空間上の制約をはじめ、同時性の制限や媒体との関連による制限等が多くあり、その結果、元発話の削除、凝縮、改変といった方法が主に用いられるため、注の使用が難しいと考えられよう。しかし作品によっては、原作(Source Text、以下 ST)に画面上の文字情報として専門用語の説明や地名の提示等を含むものがある。本発表ではこれを「注」として扱い、特に ST に元々含まれる注を「ST 内注」と呼ぶ。字幕翻訳ではセリフでさえ縮小せざるを得ないような状況の中、こうした ST 内注はどのように扱われ、翻訳版(Target Text、以下 TT)にどのように転移されるのだろうか。

本研究では、実例分析として韓国ドラマ『宮廷女官チャングムの誓い』を用いることとする。まず原作の ST 内注を全て抽出し、その分布を明らかにした上で、それがどのような機能を持つかを推定する。次にこれらの注が、それぞれ日本・台湾・香港・中国大陸バージョンにおいてどのように扱われているかを比較分析し、ST から TT への転移プロセスにおいて目的・機能がどのように変化しているかについて考察する。また、それがどのようなスコプスと繋がり、そのスコプスが具体的にどのようなコミュニケーション状況によるものなのかについても考える。

結果、ST 内注が、日本・台湾・中国大陸の放送時にはほとんど削除されたり、韓国語のままの文字情報として残されたりしていたが、香港バージョンでは一部が中国語訳されて、ST における注の機能をできる限り保持しようとする姿勢が窺えた。以上のように、同一作品に含まれる ST 内注が、異なる TT において、その扱い方が大きく異なっていることが分かった。それは、それぞれ異なる受容時のコミュニケーション状況の下で生まれた異なるスコプスによるものだと考えられよう。

2 日目 B 会場 (17602) 10:45 – 11:15

司会 河原清志

B-6

翻訳における非言語要素の役割

藤濤文子(神戸大学)

作品内に言語要素と非言語要素を含むジャンルには映画やマンガをはじめ様々あるが、そうしたテキストは非言語要素が一定の役割を演じるため、言語要素と非言語要素が相補的に作用しあう総合的なテキストであると言える。では、そうしたテキストを翻訳する場合、非言語要素はどう扱われるであろうか。視聴覚翻訳やマルチメディア翻訳の研究が進んできてはいるものの、その主な研究対象としては言語要素のみに向けられることが多い。そこで本発表では、言語要素と非言語要素のインタラクションそのものに注目して、翻訳における非言語要素の役割を論じたい。

Reiß & Vermeer (1984) は「何を言語化するかは文化により異なる」とする。例えば文化 A では言葉で表現される状況でも、文化 B では非言語で表わされることがある。そうした場合、言語化された ST 情報を翻訳では非言語化したり、逆に非言語で表現された ST を翻訳で言語化したりすることもありえるだろう。Reiß & Vermeer (1984) では、翻訳行為を非言語要素も含むものとして捉え、「テキストはそれ自体が存在するのではなく、そういうものとして解釈されるから存在する」という一貫した立場を取っている。したがって、それによると、言語か非言語か、という境界も「それ自体として存在するのではなく」、そう解釈され、そういうものとして提供するという判断がなされるということになる。

非言語要素といっても、例えばラジオ劇での効果音、テレビドラマの映像、合唱曲の音楽的要素、演劇における衣装や舞台装置など実に多様な種類があり、テキスト内におけるその機能と重要度も様々である。そうした総合的テキストの翻訳においては、非言語的役割をどう解釈し、TT でどう提示するのかを決定しなければならない。本発表では機能主義的翻訳研究の立場から、非言語要素を含むテキストの具体的な翻訳事例を取り上げて、記号間冗長性とモード間移行という観点から分析し、非言語要素の役割を考察する。

【参考文献】

Reiß, K./H.J. Vermeer (1984/1991) *Grundlegung einer allgemeinen Translationstheorie. 2. Auflage*, Niemeyer.

2日目 B会場 (17602) 11:30 – 12:00

司会 河原清志

B-7

政治的発言の逐次通訳におけるリスク管理としての lengthening

松下佳世(国際基督教大学)

逐次通訳において、通訳者は一般的に原発言よりも訳出を短くすることが望ましいとされている(Herbert, 1952)。しかし、Schäffner(2012)が指摘するように、政府首脳による記者会見やハイレベルの政府間交渉など政治的な場面での逐次通訳においては、lengtheningがしばしばみられる。クリスティーナ・シェフナーはこの理由について、政治的指導者の記者会見を担当するような熟練通訳者は、外交の現場においては適切な言葉を選ぶことがほかの場合よりもさらに重要であるとの認識のもと、「原発言に可能な限り近づけようと試みる」ため、コンテキストに応じて説明を追加するからであると指摘している(Schäffner, 2012, p. 76)。

シェフナーの考察が日英間の逐次通訳にも当てはまるのかを検証するため、2013年5月に橋下徹大阪市長が日本特派員協会で行った従軍慰安婦問題についての記者会見における日本語から英語への逐次通訳を事例として取り上げ分析した結果、通訳者の訳出において頻繁に付加や明示化によるlengtheningが行われていることが明らかになった。そこで、実際に通訳を行った通訳者に回顧的インタビューを実施し、いくつかの訳出について質問したところ、lengtheningの理由はシェフナーの指摘したものとどまらず、政治的配慮の必要な原発言に対しては、通訳者の選んだ訳出がそのまま報道機関によって引用されてしまうことを避けるために、あえて複数パターンでの訳出をするなどの方略をとっていることが分かった。

アンソニー・ピムは、通訳者や翻訳者は自らが「高リスク」と判断した訳出に関して、リスク回避やリスク軽減などの「リスク管理」を行っている」と指摘している(Pym, 2005, 2014, Matsushita, 2014)。そこで、本発表では、この事例研究の結果を報告するとともに、実際のlengtheningの例を示しながら、テキスト分析とインタビューで明らかになった明らかになった通訳者の訳出選択におけるリスク管理の可能性について考察する。

【参考文献】

- Herbert, J. (1952). *The interpreter's handbook: How to become a conference interpreter*. Geneva: Georg.
- Matsushita, K. (2014) Risk management as a theoretical framework for analyzing news translation strategies. *Invitation to Translation Studies*, 12, 83–96.
- Pym, A. (2005). Text and risk in translation. In K. Aijmer & C. Alvstad (Eds.), *New tendencies in translation studies* (pp. 69-82). Gothenburg, Sweden: Göteborg University.
- Pym, A. (2014). *Risk analysis as a heuristic tool in the historiography of interpreters: For an understanding of worst practices*. Retrieved from http://usuaris.tinet.cat/apym/on-line/research_methods/2014_history_interpreting.pdf
- Schäffner, C. (2012). Press conferences and recontextualization. In I. Alonso, J. Baigorri, & H. Campbell (Eds.), *Ensayos sobre traducción jurídica e institucional: Essays on legal and institutional translation* (pp. 69–84). Granada, Spain: Comares.

2 日目 B 会場 (17602) 13:30 – 14:00

司会 山田優

B-8

ローカリゼーションにおける翻訳者の職務意識に関する考察

鈴木理恵子(立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科博士前期課程修了)

ソフトウェアの画面やそれに付随するテキストの翻訳である「ローカリゼーション」では、脱コンテキスト化された作業が多く、多様な形式の起点テキストを素早く翻訳しなければならないうえ、固定した用語の使用を強いられるという特徴がある。翻訳メモリなど、翻訳支援ツールと呼ばれるソフトウェアを使用して、過去の翻訳を再利用しながら翻訳をしなければならないことも多い。また IT 産業においては物事の進行のスピードが非常に速く、翻訳にもスピードが求められる。プログラマーやプロジェクトマネージャー他、翻訳者とともに多くの関係者が連携して業務が進行するという特徴もある。

本発表では「正確に翻訳するにはコンテキスト(原文の背景)の情報が重要なにもかかわらず、コンテキストの情報が少なく、全体像を把握する可能性がほとんど失われた状態で素早く訳出しなければならないローカリゼーションの翻訳者は、相当な葛藤(ストレス)を感じているのではないだろうか」という問いをもとに、ローカリゼーションの翻訳者が抱えている最大のストレスは何なのかを検討する。また、ストレスを生み出す背景についても考察を行い、ローカリゼーションにおける翻訳者の現状と課題をまとめる。

研究の方法としては、量的・質的の両方のアプローチを組み合わせた「ミックス法」(抱井・稲葉, 2011)を用いた。まず、ローカリゼーションの翻訳者(フリーランス)を対象として行ったアンケート調査で得た量的データの結果を示す。この調査は、匿名・オンライン方式で行い、質問項目は「レヴィンの葛藤論」、「G.H.ミードの役割論」、「マーズローの自己実現理論(欲求説)」を理論的枠組みとして使用し、すべての質問に明確な仮説を設定して作成した。

次に、E メールによるインタビューで得た質的データの結果を示す。このインタビューの質問項目は、先に実施したアンケート調査で設定した仮説と紐づけて、回答の真意と事例を得ることを目指して作成した。

これらの調査データの分析を踏まえ、ローカリゼーションにおける翻訳者の葛藤(ストレス)という観点から産業構造の問題点の洗い出しも試みる。

【参考文献】

末田清子・抱井尚子・田崎勝也・猿橋順子(2011).『コミュニケーション研究法』ナカニシヤ出版.

2 日目 B 会場 (17602) 14:15 – 14:45

司会 山田優

B-9

研究法の視点から見た通訳研究の可能性と課題: 研究法・論文執筆プロジェクト活動報告

石黒弓美子(東京外国語大学)

新崎隆子(東京外国語大学)

高橋絹子(上智大学)

田村智子(早稲田大学)

戸谷比呂美(武蔵野大学)

渡部富栄(大東文化大学)

研究方法は学術研究の信頼性と妥当性を決定する重要なカギである。国内の学会には、最近、研究法・論文執筆に関するセミナーや勉強会を開く動きがある。その中には、国内・海外の権威あるジャーナルへの投稿経験の豊富な学会員が、専門分野別に若手研究者の研究や論文執筆の指導を行う「論文塾」を開き、日本人研究者の国際的な活躍に貢献する活動をしているところもある。

通訳研究は歴史が浅いためかその方法論は未だ確立されておらず、日本通訳翻訳学会の学会誌では、実証研究でも「研究方法」の項目を設けていない、または研究設問への答えを探るためにその研究法が適している根拠を記述していない論文が見られる。また、国内の人文科学系の学会誌を見ると、世界的な標準とされる APA (American Psychological Association) style などに準拠しているのが主流だが、本学会は必ずしもそれらの形式に沿うことを求めていると思われない。通訳研究は言語学、教育学、コミュニケーション学などにまたがる学際的な性格を持つため、他の分野の専門家と共同研究を行う可能性も高い。特に若い研究者には標準的な研究法や論文執筆法を学ぶ必要があると考える。

このような問題意識に立ち、私たちは通訳研究の発展と研究者育成のため、学会活動の中に研究法や論文執筆に関する研鑽を取り入れるべきだと考え、その小さな一歩として 2014 年度に「研究法・論文執筆プロジェクト」を立ち上げた。プロジェクトでは講師として早稲田大学教授、佐渡島紗織氏を招き、ワークショップ「研究を構想し執筆する」を 2 回に分けて実施した。第 1 回は「研究の目的と方法」、第 2 回は「研究論文の組み立て方を学ぶ」をテーマとし、大学院生など論文執筆の未経験者だけでなく経験豊かな大学関係者も参加した。また 6 人のメンバーは通訳研究法の教科書とも言える Hale, S. & Napier, J. (2013) *Research Methods in Interpreting*. UK: Bloomsbury. の輪読会を行い、質問紙法、エスノグラフィー、談話分析、実験法などがどのように通訳研究に応用できるかを検討した。

発表では、異文化コミュニケーション学会などに見られる研究法・論文執筆方法に関する問題意識の高まりと取り組みを紹介した後、プロジェクトで実施した 2 回のワークショップについて報告する。さらに、研究法の視点から、今後の通訳研究の可能性について議論したい。

1日目 C会場 (17502) 14:00 – 14:30

司会 武田珂代子

C-1

医療通訳経験者の派遣内容と今後の課題: あいち医療通訳システム認定医療通訳者の派遣実績調査から

浅野輝子(名古屋外国語大学)

津田守(大阪大学、名古屋外国語大学)

服部しのぶ(藤田保健衛生大学)

村井はるか(藤田保健衛生大学)

在住外国人や増加する外国人観光客のための医療に対する言語支援の必要性とその充実化が認識されるようになってきた。愛知県は、2011年度にあいち医療通訳システムを自治体として全国に先駆けて創設し、これまで英語、中国語、ポルトガル語、スペイン語、フィリピン語の各言語、合計約270名の医療通訳者を養成し、派遣事業を行ってきた。しかし、修了者が具体的にどのような言語支援を行っているかについて、明らかになっていなかった。

そこで、2015年2月、実態調査と将来の課題抽出のため、あいち医療通訳システムにおいて養成・認定され、派遣された実績のある医療通訳者47名にオンライン上で選択式・自由記載式アンケート調査を行った。質問は、医療通訳の経験について31問で構成され、45名から回答を受け取った(有効回答数96%)。

結果は、派遣された診療科は内科、精神科、小児科の順で多かった。病院内での通訳時に訳しにくいと感じることがあるかという質問に対しては、約65%が訳し難いと感じていた。通訳時の言語変換の経験として、単語がとっさに浮かばず苦勞する、的確な訳が出てこないため言い直す経験をした回答者が多かった。心理的負担に関する質問では、感情移入して患者を気の毒に思い、ずっと気にしたり、自分の誤訳や訳し落としが他人の命に関わることに不安を覚えたりする、という回答も高い値を示した。通訳能力の維持は、フォローアップ研修への参加の他、約半数が独学であった。

考察として、通訳の介入の多い診療科の医療知識の充実に加え、精神科での通訳、重症患者への感情移入といった心理的負担を考慮すると、医療通訳者のメンタルケアについてもフォローする必要があると言える。また、インフォームドコンセントを得る、結核保菌者への治療、手術室などの場面での通訳など、通訳者のアドボカシーの在り方についても今後の養成プログラムにおける検討が課題として明らかになった。

今回の調査から、フォローアップ研修の実施、通訳需要の多い診療科の医療知識を中心とした教材開発、高度な言語変換技術のトレーニング、ストレスマネジメント技能の習得が急務であることが明確になった。

尚、本発表は、平成26年度～平成28年度科学研究費助成事業挑戦的萌芽研究(26580120)「自治体による医療通訳者養成と活用: <あいち医療通訳システム>検証と全国モデル構築」の成果の一部である。

1 日目 C 会場 (17502) 14:45 – 15:15

司会 武田珂代子

C-2

医療通訳ウェブ教材開発について

大野直子(順天堂大学)

加藤純子(大阪大学)

日本における外国人人口およびその労働力人口は近年増加している。アジア各地における医療観光がますます盛んになり、日本でも、一部の医療機関で外国人患者の受け入れを始めている。外国人医療の問題としては、言葉の壁が原因で治療に対する積極性に差が生まれ、健康格差につながるという報告もある。健康格差を防ぐべく、在日、訪日外国人と日本の医療をつなぐ存在が医療通訳であり、その重要性はますます高まっている。本研究では、日本の外国人医療を促進するため、日本でことばに不自由なく診療が受けられる環境を整備するべく、在日、訪日外国人と医療をつなぐ医療通訳の人材を養成することを目指し、医療通訳ウェブ教材を開発した。本研究は「在日・訪日外国人のための医療通訳養成システム構築に関する研究(研究課題番号:26893276)」という正式名称のもと、実施中の研究プロジェクト(科学研究費補助金・研究活動スタート支援、平成 26 年度～28 年度)の一部である。

最終的には対面と PC 上の学習を組み合わせた学習(ブレンド学習)のパイロットプログラムを考案することを目標とする本プロジェクトの一部である日英医療通訳学習用 Web 教材を作成したので報告する。医療通訳では、患者が病院を受診する際に体験する受付から薬局での処方箋受け渡しまでの一連の流れにおいて、それぞれの状況に応じた対話を含むトレーニングが必要である。今回は、そのための効果的な方法について研究するため、医療通訳の基礎的なトレーニングのためのマルチメディア教材を作成した。この教材は、病院で交わされる典型的な対話を含めた Web 教材で、患者が病院を受診する際の通訳という状況設定で通訳を役割体験できる。

本発表では、上記のウェブ教材を紹介するとともに、この教材の改善点についてご意見を伺いたい。本研究により広く使用可能な医療通訳養成システムを構築し、外国人医療の言葉の障害による医療格差の問題を解決する一助となることを目指す。

1日目 C会場 (17502) 15:30 – 16:00

司会 武田珂代子

C-3

逐次・同時通訳訓練に iPad を導入することによって得られる効果

吉村謙輔(中央大学)

ドイツ連邦政府の公的ドイツ語教育機関であるゲーテ・インスティテュートの東京校では、1987年に独日通訳コースが開設された。そこでは現在、逐次・同時通訳訓練を受講者間のインターアクションを重視した3人チーム形式で行っている。3人が一つの広いテーブルを囲むレイアウトで、ウイスポリング練習でさえ、チームメイトに語りかける形式で行っている。日本語の複雑な文章を一人が平易な自分の日本語に直し、語りかけ口調で伝え(同言語内翻訳)、それを一人がドイツ語に逐次通訳し、その通訳をもう一人が聴き手として聴くというチーム作業が特徴である。全てのパフォーマンスに対してチームメイトからのサポートとフィードバックが即座に得られる。ゲーテ・インスティテュート東京校通訳コースの受講者は主として現役の司法通訳者、外交通訳官、放送通訳者、コミュニティー通訳者などであり、すでに通訳者として日頃活動している人達である。したがってこのコースは現役通訳者のための *Weiterbildung* (継続教育) と意見・情報交換の場としての性格を強く持っている。日本では軽視されがちな通訳者の職業倫理、労働環境などについても現場体験を踏まえた討議を活発に行っている。また2014年には同校の技術担当者 Hillesheim 氏と iPad を逐次・同時通訳訓練に活用する方法を検討し、授業に導入した。従来の同時通訳訓練ではガラス張りの高価な同時通訳ブースと音響設備が必要であった。設備の老朽化の問題も多くの場合深刻である。またインストラクターは個々の受講者のパフォーマンスを聴き、評価するためにコンソールで煩雑なインプット切り替え操作をする必要があった。一人一台の iPad を使えば、インストラクターはテーブルの間を適宜巡回しながら、受講者のアウトプットをマイクを通さずに聴き、直接助言をすることができる。従来の狭い遮音ブースではなく、開放的な空間でスペースと設備費を節約することが可能である。また iPad の高音質と高速度のメリットを生かしながらインターアクティブ(インストラクターと受講者との間のインターアクションと受講者相互のインターアクション)な逐次・同時通訳訓練を行うことができる。この発表では、iPad の利用の仕方を紹介し、アプリを含む今後の技術的可能性を検討する。

1 日目 C 会場 (17502) 16:15 – 16:45

司会 武田珂代子

C-4

翻訳テクノロジー教育の e ラーニング化の提案

山田 優(関西大学)

立見みどり(立教大学)

日本の大学における翻訳教育、特に翻訳者養成は欧州などと比べると立ち遅れており、翻訳者教育は民間の翻訳会社に付属する翻訳スクールなどに任されてきた。しかし 2015 年、高品質な翻訳サービスに求められるリソースやプロセスを定めた ISO 17100 が発行されたことにより、今後、翻訳教育において高等教育機関が大きな役割を果たすことが求められる。また、翻訳需要が高まる今日、翻訳者教育だけでなく、ビジネス面から翻訳関連業務に携わるプロフェッショナルや、翻訳サービスの効果的な利用者となるための「翻訳リテラシー」教育に対する需要も高まるだろう(武田・山田・辛島, 2014)。中でも、ISO 17100 に規定される翻訳者コンピテンスのひとつ「Technical competence (テクノロジースキル)」(European Master's in Translation を参照)について学ぶ機会は、学生にとってもプロフェッショナルにとっても、現時点では少なく、今後その拡充が求められるだろう。そこで、日本通訳翻訳学会・翻訳通訳テクノロジー研究プロジェクトでは、翻訳テクノロジーを学ぶための教材作りに着手した。

第一段階として、誰もが基礎的知識の習得に使えるようなビデオ作りを行っている。近年、ビデオを使ったセルフラーニング、特にマイクロラーニング方式での知識習得への注目が高まっている。本プロジェクトでは、翻訳テクノロジーに関するいくつかのテーマを設け、それぞれ 6 回程度、1 回 10 分程度の、デモを交えた講義ビデオを作成中である。

このような形態の学習教材の用途は幅広い。大学や大学院での翻訳関連コースの補足教材として利用すれば、反転学習の教材としても、またその分野の教員不足を補う手段としても有効であろう。また、YouTube などのサイトにアップロードすれば誰からもアクセスしやすいため、実務者のスキルアップや、翻訳に興味を持つ一般の人々の間での翻訳業務や翻訳テクノロジーの認知度向上にも貢献できる。このような情報発信を、大学、学术界から行うことの意義は大きいと考える。

本発表では、現在計画しているビデオ教材コンテンツの内容を紹介し、そのコンテンツを公開する。また大学の授業での具体的な導入例を提案し、内容、活用法、今後の展開の可能性などについて、参加者と、議論・意見交換をしたい。

【参考文献】

武田珂代子・山田優・辛島デイヴィッド (2014) 『「翻訳通訳リテラシー教育」の提案に向けて』『通訳翻訳研究』14, 1-14.

2日目 C会場 (17603) 10:00 – 10:30

司会 長沼美香子

C-5

エラーカテゴリーに基づく翻訳学習者の学習過程における習熟度の分析

山本真佑花(神戸女学院大学大学院文学研究科英文学専攻 M)

田辺希久子(神戸女学院大学)

藤田 篤(情報通信研究機構)

翻訳において修正 (revision) は欠かせないプロセスとなっている。学習者の翻訳を修正するにあたって、翻訳エラーを一貫して判断する基準となるモデルは長らく存在しなかったが、近年、英日翻訳におけるエラーを17個のカテゴリーに分ける分類が提案された (Babych et al., 2012)。Toyoshima et al. (2015) および Toyoshima (2015) は、このエラー分類に基づき、学習者のレベルによってエラーの傾向が異なること、初心者は上級者よりも多くのエラーを生じること、上級者は理解面よりもレジスターやコロケーションなどの目標言語に関するエラーが多いことなどを示した。しかしながら、これらはある特定の時点での翻訳の分析に留まっている。

本研究では Babych et al. のエラー分類に基づき、大学での半期の翻訳授業を通しての学習者のエラーの傾向と変化について報告する。上記の先行研究とは異なり、この授業では、教員を含む添削者が学習者の翻訳におけるエラーを指摘して修正させるプロセスを通して、学習者にエラー分類を理解させるとともに、我々の研究グループで開発した決定木(論文誌投稿準備中)を用いて学習者自らがエラー分類を行えるように指導し、最終的には学習者間でのピア評価ができるようになることを目標としている。本研究では、授業内で学習者にエラー分類を教えることにより、授業の回数を追うごとにどのカテゴリーのエラーが減少しやすく、どのエラーが改善困難のまま残るのか、また上記の先行研究で報告されたエラーの傾向との類似性について考察する。具体的には、翻訳課題文書それぞれにおけるエラー出現数と出現率、エラー分類ごとの出現数・出現率とその推移変化、および学習者ごとの各統計量に基づいて分析する。さらに、授業開始時と終了時に実力テストを行い、授業の前後での学習者の習熟度の変化を観察する。

【参考文献】

Babych, B, A. Hartley, K. Kageura, M. Thomas and M. Utiyama. "MNH-TT: A collaborative platform for translator training." Proceedings of Translating and the Computer 34. London, England, November 29-30, 2012.

Toyoshima, Chiho. An analysis of error categories in learners of English-to-Japanese translation. Master Thesis, Kobe College, March, 2015.

Toyoshima, C, K. Tanabe, A. Hartley, K. Kageura. "Error categories in English to Japanese translations." 言語処理学会第21回年次大会発表論文集, pp. 1076-1079, March, 2015.

2 日目 C 会場 (17603) 10:45 – 11:15

司会 長沼美香子

C-6

英語教師志望者による「翻訳」と「英文和訳」: プロダクトとプロセスの観点から

守田智裕 (広島大学大学院教育学研究科英語文化教育学専修 M)

従来、中高の英語教育における訳の研究は、学習者が訳す場面 (訳産出) に着目してきた。しかし実際の指導場面においては、学習者が訳文を読みながら英文を理解するという場面も存在する (例: 和訳先渡し実践など)。これは、訳産出というより訳理解といえるだろうが、管見の限り英語授業における訳理解に関する研究は行われていない。学習者に配布する訳文を分類すると、教科書会社等が作成した「でき合いの訳 (ready-made translation)」と教師自身が訳す「手作りの訳 (tailor-made translation)」になる。手作りの訳は、教師が現前する学習者の熟達度や授業の目標に合わせて調整することが可能である。その一方、教師の時間的負担や訳す能力が求められることが課題であろう。本研究は、英語教師志望者が中学校検定教科書に掲載されている題材をどのように訳すかを調査することで、手作りの訳がどのようなものを把握することを主眼とする。

調査協力者は大学の英語教育専攻の学部生 30 名で、題材は中学校 3 年生の教科書に掲載されている“A Mother’s Lullaby”を選定した。調査手順として以下の 2 通りで協力者全員に訳すよう依頼した。(1) 英語が得意な生徒が読んで日本語と英語の違いに鋭敏になるような日本語として自然な「翻訳」、(2) 英語が苦手な生徒が読んで英文を理解できるような原文に忠実な「英文和訳」であった。また、協力者の中の 2 名にインタビューを行い、翻訳の際の意図やこだわりを尋ねた。さらに、その 2 名の訳文およびインタビュー結果を翻訳経験者に二次観察してもらい、翻訳プロダクトおよびプロセスを評価するよう依頼した。「二次観察」とは社会学者ニクラス・ルーマンの術語であるが、ここでは翻訳経験者が、訳者自身も気づいていない部分について言及する様子を指す。分析の対象は、「翻訳」プロダクト・「英文和訳」プロダクト、および訳者自身の発話プロトコル・二次観察をした翻訳経験者の発話プロトコルである。分析方法は修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いた。

翻訳と英文和訳両方のプロダクトを比べた結果、翻訳の方が態の変更や明示化など訳の工夫などを示す様子が見られた。また、インタビューから、訳者たちが工夫した点が必ずしも翻訳経験者には成功したと捉えられなかったことが分かった。当日は、プロダクトおよびプロセスの両面から、英語教師志望者の (1) 「翻訳」および (2) 「英文和訳」の様子を発表する。

2 日目 C 会場 (17603) 11:30 – 12:00

司会 長沼美香子

C-7

Impact of teacher written feedback on students' translation: How 'mistranslation' is treated

鹿野 緑(南山大学)

Editing and revising can be considered to be an essential part of the process approach to translation, as is considered so in ESL/EFL (English as a second language/foreign language) writing classes (Mendonca & Johnson, 1994; Tsui & Ng, 2000). Providing students with teacher-written feedback (TWF) on their translation drafts and conferencing will help them notice 'mistranslation', and so will the student-student peer review.

This presentation is aimed at investigating the impact of process approach of TWF used in a translation workshop offered as an elective at a university; it examines its impact on the improvement of students' translation outcomes, and how students' mistranslation is treated and revised. The textual data obtained from the 16 sets of the presenter's own teacher-written feedback on students' translation drafts (translating paperback chapters of English to Japanese). The qualitative teacher-written feedback text was analyzed to identify what types of mistranslation the teacher identified, to what extent she corrected it, and what wording was used. The results showed that teacher-written feedback of this study tended to point out 1) original text grammar structures (i.e., students were not able to grasp them analytically), 2) students' wrong choice of *yakugo* (equivalence), 3) background knowledge about the context, and 4) wording and flow of the target text. By repeating the feedback process, students were able to self-monitor and self-edit their own products, in terms of 2) and 4), but 1) and 3) errors remained. Details of textual analysis will be discussed at the presentation.

Mendonca, C. O. & Johnson, K. (1994). Peer Review Negotiations: Revision Activities in ESL Writing Instruction. *TESOL Quarterly* 28, 4, 669-839.

Tsui, A. & Ng, M. (2000). Do Secondary L2 Writers Benefit from Peer Comments? *Journal of Second Language Writing*, 9(2), 147-170.

2 日目 C 会場 (17603) 13:30 – 14:00

司会 石原知英

C-8

スラッシュ・リーディングと音読訓練: 初級英語クラスにおける実践報告及び学習方法と学習動機への影響

篠塚勝正 (成城大学他)

柴田節枝 (カリフォルニア州立大学フラトン)

水澤祐美子 (慶応義塾大他)

本発表では、(1)大学 1、2 年生の英語専攻でない初級英語クラスでの、通訳訓練法のスラッシュ・リーディング後の音読指導とその成果の実践報告、(2)音読指導が学習者の学習方法、学習動機にどのような影響を与えたか、の2点について発表する。(1)では、2013 年の初級レベルの英語の授業において、音読指導を毎回取り入れることにより、学習者の英語力が飛躍的に向上したが、統計データを提示しながら、その結果を説明する。本研究における音読指導では、単に有声化してテキスト読ませるだけではなく、スラッシュ・リーディングによる意味理解、基本文法事項の説明、特に音読時には英文を音声入力と同様に、左から右へという順序で意味理解をするよう強調した。また、この音読訓練では立ったり座ったりという動作や、参加者同士でお互いに音読速度を競い合うといった活動のほか、音読後にテキストの内容の推測力、想起率、文法力の再確認のために Cloze test も行なった。さらに、音読筆写では実際に構音し、手を動かしながら筆写するといった指導も組み入れた。TOEIC Bridge®の Pre-test と Post-test の結果、音読群が非音読群と比べ、Listening、Reading 共に Post-test のスコアが有意に高くなった。また、英語学習では、学習者の学習方法や動機が非常に大きな役目を果たすことは先行研究で明らかであるが、音読指導がそれらにどのような影響を与えるかの研究はまだない。そこで(2)ではこれらを検証すべく、2014 年に(1)とは異なる英語初級クラスで音読指導を行い、音読指導の成果のほか学習者の学習方法と学習動機についても Pre-test、Post-test を実施した。その結果、2014 年度も 2013 年度同様に、音読群の TOEIC Bridge®のスコアの向上が統計的に確認できた。学習方法の測定には Oxford (1990)を用い、1) Memory strategies、2) Cognitive strategies、3) Compensation strategies、4) Metacognitive strategies、5) Affective strategies、6) Social strategies の 6 つ因子に分類し、一方、学習動機には Garder & Lambert (1976) の調査を用いて、1) コミュニケーション、2) 文化理解、3) 学術的興味、4) キャリア志向、5) 利益享受、6) 必修科目の 6 つの因子を抽出した。その結果、学習方法では、音読指導により Social strategies、すなわち一人ではなく学習者同士で学びあうという方法が有意に誘発されたことが判明した。学習動機に関しては、音読指導の前後ではほとんど変化がみられなかった。本発表では、これらの結果の考察と今後の課題についても述べる。

2 日目 C 会場 (17603) 14:15 – 14:45

司会 石原知英

C-9

Using back-translation as a tool for promoting focus on form

花岡 修(東京国際大学)

In communicative language teaching, the use of translation tends to be discouraged due to its association with the traditional grammar-translation method. However, when used judiciously, it can assist L2 learning by promoting an important aspect of second language acquisition. In this presentation, I would like to show some examples of back-translation tasks intended to raise learners' awareness of grammar and other features of language, and discuss the merits of such tasks from a theoretical viewpoint.

In the preliminary study reported in this presentation, students were provided with dialogues from the movie "Frozen," which had blanks in places where the original lines were to be compared with the Japanese translations. For the blank spaces, students were given Japanese subtitle or dubbed translations and were asked to guess the original English lines. The targeted grammar feature for this task was the passive voice. I deliberately chose lines where the passive voice was translated into the active voice or vice versa to promote reflection on the choice of voice. The purpose of the task was for students to engage in cognitive comparison between the form of their output with the original English form and deepen their awareness of the function of the passive voice.

To provide theoretical support, I will first review the current debate on the role of grammar instruction by referring to three representative positions. One of them argues that grammar instruction does not play any role in L2 development, while an opposite position, typically taken by skill acquisition theorists, claims that conscious understanding of grammar is the first step toward learning to use the target feature automatically. The third and most widely accepted view is that grammar instruction helps L2 development indirectly by inducing noticing of relevant features in input. I will argue for the benefit of back-translation tasks based on this third position. I will then cite the notion of "focus on form" and explain the advantages of the proposed tasks in facilitating the process of form-meaning-function mapping required for grammar knowledge usable in communication. Finally, I will discuss some pedagogical considerations that would make the tasks effective for students at different levels of proficiency.

2 日目 C 会場 (17603) 15:00 – 15:30

司会 石原知英

C-10

The applied performance test of English interpreting in the written form: Testing and assessment in English interpreting studies at universities in Japan

山田宏子(関西外国語大学短期大学部)

To date, the field of interpreting studies has been exploring more empirical evidence for the quality of testing and assessment of interpreting performance. Nevertheless, there have not been any established methodologies in this field yet and the approach to grading is still intuitive and impressionistic (Sawyer, 2004). “The assessment of interpreting performance is an area of research that is still in its infancy (Jacobson, 2009, p.49).”

Presently, the number of English interpreting courses offered at the universities in Japan is rapidly increasing and the number is likely to increase in the years ahead. Considering the inherent nature of interpreting, traditional testing methods generally offered in normal English language classes cannot be directly employed by English interpreting courses at the universities. Nevertheless, functional tests with pragmatic procedures exclusively applied to this subject have yet to be constructed. One of the critical issues of English interpreting subjects in the area of university academia is a lack of systematic testing methodology and assessment criteria.

At present, there are primarily three distinct testing methods employed in English interpreting courses for criteria-referenced testing, of which one is typically employed by instructors in a generally arbitrary manner. They are “The conventional paper-based test on grammar and translation,” “The audition-type performance test,” and “The computer-based recorded verbal performance test.” However, none of these is satisfactory on several counts including time efficiency and marking accuracy.

I used to administer a computer-based recorded verbal performance test and implement it in the CALL room. This is a testing method that requires an examinee to actually perform interpreting in front of a terminal while his or her performance is recorded. However; this test has some flaws. The most serious constraint is that it takes instructors an enormous amount of time and effort to rate students’ recorded verbal performances, which are recovered through a USB. It is particularly arduous when an instructor is assigned to teach several classes numbering around 100 students, since this accounts for as many as two thousand files of their recorded performances that need to be rated.

It is in this context that I propose a new testing model which can be employed as a criterion-referenced test at the universities to replace the conventional “computer-based recorded verbal performance test.” The purpose of this test is for it to improve ease of implementation and expedite marking and grading of the interpreted rendition, and furthermore to enhance the quality of assessment. It is called “The Applied Performance Test of English Interpreting in The Written Form”, and its features include an assessment instrument and a scoring rubric, which can be universally used by any rater.

Utilizing data from 160 students who concurrently took the identical interpreting performance tests in two test modes, the recorded verbal form and the written-form, in the mid-term and final examination periods, two tests were examined based on several theoretical constructs particularly reliability and feasibility. The findings demonstrate the superiority of the written form to the recoded verbal form and illustrate how the scoring rubric based rating system is a determining factor for the legitimacy of the performance test in the written form.